



「若い頃に、義太夫節を勉強することは大切なことで、これが楷書の修業です。楷書の義太夫物から入って、楷書に戻る。これが歌舞伎役者の辿っていく道なのではないかと考えております」

「私は、十二、三歳の頃に大阪にいて喜左衛門お師匠さん(その頃はまだ勝平時代です)に、『時雨の炬燵』を習いました。兄貴たちは『太十』『十種香』という当たり前のものを習いましたが、私だけはどういうわけか『時雨の炬燵』でした。しかし、この稽古は厳しいものでした。お師匠さんが二十歳ぐらいの時、の筈なのに、そんな年齢とは、とても思えませんでした。」

文楽と歌舞伎とは違いますから、あちらが演じている通りを真似ていけばいい、というものではありません。義太夫節を消化したうえで、歌舞伎として演じなければいけません。『忠臣蔵』に綱大夫さんが出られたのが最後の舞台になってしまいました。が、楽屋で部屋が隣り合わせだったので、文楽の由良之助について、いろいろ教えて頂きました」

二代目尾上松緑

季刊雑誌「歌舞伎」

昭和四十四年四月一日発行号

(「新・役者論語」特集)